

そこにある、見えない命のために ～マタニティマークに込められた思い～

●思いやりのマークが……危険？！



図 1 マタニティマーク(厚生労働省推奨)

「マタニティマーク 危険」——。検索ワードの予測欄を見て、驚いた。ピンク色のハート柄を背景に、お母さんが赤ちゃんを抱いている絵柄。マタニティマークは2006年、厚生労働省の母子の健康水準向上のための国民運動計画「健やか親子21」推進検討会によって、妊娠・出産に関する安全性と快適性の確保を目指すために作られた。お腹のふくらみがあまり目立たない「妊娠初期」はとくに出血が起こりやすく、つわりなどの症状から、妊婦は心身ともに不安定な時期となる。交通機関や飲食店など混雑している場所で、周囲に妊娠していると示すマタニティマークを身につけることで、妊婦の心と体を守る役割が期待されている。こうした理念と「危険」という言葉があまりにも不釣り合いで、違和感を覚えずにはいられなかった。

マタニティマークは、各自治体の窓口で母子手帳とともに交付されるほか、JRや大手私鉄の主要駅などで無料配布されている。さまざまな公共機関でも、マークの普及を呼びかけるポスターが掲示され、妊婦にやさしい環境づくりを推進している。その甲斐もあって、現在、多くの妊婦がマークを所持している。マタニティ情報誌『妊すぐ』が2014年2月に行った調査によると、対象となる妊婦のうち、96%が「マークを持っている」と答えた。しかし、実際に「マークを身につけているか」という問いに対して「外出時いつもつけている(つけていた)」と答えたのは、53%に過ぎなかった。さらに「場合によってつけている(つけていた)」が23%、「いつもつけていない(つけていなかった)」は24%という結果となり、マークを持っているにもかかわらず、その約半数が「いつも」身につけていないことが明らかになった。

この調査のなかで多くの妊婦たちはマークを付けるタイミングを「公共交通機関を

利用する時」、「人の多いところや慣れない土地に行った時」と答えている。しかし、そのなかで、気になる回答もあった。それは、「嫌がらせされるのでは？というネットの書き込みを見たため、つけない」というものだ。妊婦の助けになるはずのマタニティマークが、危険を招くきっかけになっているのではないか。このことは、マーク本来の意図とは異なる現象が起きていることの表れなのではないか。

マタニティマークに込められた思いを改めて考え、私たちはマークとどのように向きあうべきなのか、見直したい。

●マタニティマークの先駆け「BABY in ME」

世界初のマタニティマークを生み出したのは、横浜市在住のフリーライター村松純子さん。1999年、彼女は「BABY in ME」のデザインを考案し、のちに厚生労働省によるマークデザイン募集のきっかけにもなっている。その経緯について、2018年11月29日に村松さんに聞いた。

「まだお腹が目立たない妊娠初期のころ、電車の中でつわりを起こしたのに、酔っ払いに間違えられ白い目で見られた」。妊娠した友人からの話を聞き、そういう時に何かマークのようなものがあれば良いと思ったことがきっかけだった。デザインの完成に1年以上の歳月をかけ、BABY in MEのウェブサイトを開設した。

BABY in MEを考案した当初、「妊娠初期の母体の変化や体への影響」にスポットを当てたウェブサイトは、ほとんどなかったという。今から約20年前、現在よりも子育てへの関心が低い時代に、妊娠を公表するマークに対する意見は賛否両論だった。村松さんは「そもそも隠すようなことじゃないし。お腹が大きくなったら、みんな『おめでとう』って言いますよね。妊娠初期のほうだけ分からなくすることに大きな疑問がありました」と語る。

「妊娠初期ってなんですか、どうして大事なんですか」。女性から、このような声をたくさん聞いた。出産を経験しても、妊娠時につわりを体験していなかった人もいるため、つわりで体調を悪そうにしている姿も、ただ甘えているだけのように思われてしまうこともある。「情報や知識がないと、こういうことが起こる。『なんで労わるのか、優しくちやほやしないといけないの』って平気で言われたし、疑問視されました」。当時を振り返りながら村松さんの声が、悲しく響いた。

●マークに込められた思い

のちに厚生労働省が制定したマタニティマークとBABY in MEのロゴマークでは、デザインに大きな違いがある。村松さんによると、最初はコアラやカンガルーのモチーフなども考えたが、子供は描かないと決めていた。なぜなら、子供を描くと、出産後のイメージになってしまうからだ。「お腹が小さくない、見た目では分からない妊婦さんの状況を、ふと立ち止まって考えてほしい」という一心だった。お腹の大きな女性を象徴的にデザインし、ハートマークには「命が宿っていること、babyを感じて」という願いが込められた。線画



© BABY in ME

図 2 BABY in ME のロゴマーク

タッチでユーモラス感を表現し、これからママになる若い層のファッションに馴染みやすいように工夫を重ねている。気軽に身につけて外出できるように、「オシャレなグッズ」をイメージしてデザインした。また、見た人が自然に笑顔になって、優しい気持ちになれることを重要視した。実際にアクションを起こすのは、マークを見た周囲の人だからだ。

「BABY in ME」という言葉を生み出したことにも強いこだわりがある。そもそも、マタニティは妊婦を表す言葉ではなく、「母であること」(名詞)・「妊娠中の」(形容詞)

を意味している。妊婦を正しく英語表記すれば、pregnant woman と書く。けれども村松さんは、「とにかくお腹の赤ちゃんに注目してほしいんです。マタニティだと、お母さんが主体になりますよね。『私が妊娠しています』みたいな」と力強く語る。その上、maternity や pregnant の意味を知らない人も多い。だからといって妊娠という漢字表記は、当時の時代背景では受け入れられにくい。女性のお腹にハートマークを描いただけのイラストを年配の方に見せたところ、心臓が下のほうにあると誤解されたこともあり、赤ちゃんを強調するには、BABY を表記することが一番だという考えに至った。そこで生まれたのが「BABY in ME」という造語だ。英語がよく分からない人でもなんとなく読めるように工夫した結果だった。

「言葉の数は、その国や民族がどれだけそのことを考えているかの証。だから、『妊娠』という言葉に関連する表現がないということは、妊娠はこれまであまり注目されてこなかったんだろうと思いました。それなら、新しいものを一個でも増やしたい」。そんな思いを具現化したのが「BABY in ME」だ。

●目の前にある奇跡を大切に



図 3 村松純子さん

「BABY in ME を作ろうと思った時点で、嫌がらせを考えるような人はいるんだろうなあって。悲しいことだけど起こりえるなって思っていました」。現在、マタニティマークを取り巻く問題についてうかがった。妊婦向けのネット記事でも多く取り上げられている話題だ。マタニティマークへの意見はインターネット上でたびたび議論されており、「望んで妊娠したくせに、なんでマークを着けただけで特別扱いされるとってんの?」、「ドヤ顔の無言で席譲れやマークを誇示されても、絶対に譲らない」と、特別視することに反発する声が目立つ。新聞にもマタニティマーク利用者の声がしばしば取り上げ

られる。例えば、「妊娠中に頻尿に悩まされていた女性がスーパーの優先トイレを利用した際、かばんに付けたマークに気づいた高齢の女性から『病気じゃないんだから使うな』と怒鳴られた」（『日本経済新聞』2015年11月25日）。

「どうして、そこに確かにある大切なものに、見えないだけで意識が向けられないんだろう」と村松さん。怒ってしまう人にも、何か事情があるのかもしれない。しかし、目の前にいるのはお母さんだけではなく、これから生まれるもう一つの命だ。「子供が健やかに育つ社会にしていこうというのは、たぶんほとんどの人が思っています。若い妊婦さんがどうこうではなく、その先の未来っていうのかな。立ち止まって考えてほしいです」。これは、村松さんがずっとテーマにしてきたことだ。「赤ちゃんは奇跡的に生まれてくるものだから。そんな貴重な命を大事にしようっていう気持ちに、率先してなっていきたい」と語った。

周囲の人たちの心に余裕がないことにも原因がある。たとえば、満員電車。朝でも、座っている人のほとんどは寝ている。みんなが寝ていたら、マークを見ることもない。そういう変則的な世の中についても、考え直していく必要がある。妊婦に対する思いやり以前に、いまの社会でいいのか、マタニティマークに限らず見直すべきときなのかもしれない。

「これは究極的なテーマですが……」村松さんは静かに語りはじめた。「男の人でも、妊娠・出産は自分の問題。そうやって生まれてきたのですよね。自分が生まれる前、お母さんが、だれかに親切にしてもらったかもしれない。そう考えると、皆のテーマなんです。男性も当事者意識を持ってほしいと思う。関係ない人なんて、一人もいない」と村松さんは言い切った。

マークに気づいたら、譲らなければならない、優しくしないといけないのではない。強制されるものではなく、自然とそういう気持ちになってほしい。何もしなくてもいいから、優しい視線を向けてあげてほしい。マークの役割は、そういうムードや仕掛け作りにあるという。「マークが目に入ったことで『あら～そうなのね、おめでとう』みたいな。ちょっとでもにっこりするシーンが増えれば、社会の雰囲気も変わると思うんです」。村松さんは、もっと遠くの未来にも目を向けている。「もし、一人でも席を譲るシーンがあれば、とくに子供たちが『ああ、席を譲ってもいいんだ』って思ってくれば、どんどん繋がっていく。そういうきっかけ作りが大事なんです」。とても明るい声だった。

●かけがえのない自分のカラダ

デザインが決まって最初に作ったのは、Tシャツだ。たった2ページしかないウェブサイトを開設し、一人ひとりと直接やり取りをしながら個人で活動をしてきた。朝日新聞朝刊（2000年5月19日）に活動の記事が掲載されたことで注目を集め、多くの新聞雑誌・テレビやラジオで取り上げられ、缶バッジやキーホルダーなど商品の種類も増えた。2013年には、週数や出産予定日などをカウントダウンしてくれるマタニティカレンダーアプリの配信が始まっている。東京都千代田区では2003年から母子手帳と共にバッジを、2014年からはバッグチャームを配布している。



図 4 BABY in ME のグッズ (バッチ・キーホルダー)

「ただマークを配るだけでなく、妊婦さんはこういう風に体が変わっていくんだよとか、そうやって皆生まれたんだよっていう情報をどこかで提供しないとイケません」。村松さんは、聖路加国際大学発のNPO「からだフシギ」というプロジェクトにも携わっている。5、6歳児を対象に、絵本で消化器系や血の流れなど基礎的な人体の仕組みを教える活動だ。「自分の体ってすごいことを知ってもらおう。自分を大事にする＝周りを大事にすることの入り口ですから」と、体の教育の大切さを訴える。例えば、頭を叩いたら脳がダメージを受けることを教えると、友達のを叩かなくなる。その延長線上で、妊娠初期の大切さを理解するきっかけになってほしいという。

自身の考えが受け入れられるのか、不安もあった。しかし、グッズ販売で利用者とやり取りをするなかで、嬉しい声がたくさん届いた。自分自身で使うため、友人への贈り物、妊娠した娘へのプレゼントなど、さまざまな形でマークは広まっている。印象的なエピソードがある。とある妊婦が、アメリカの同時多発テロ事件によりホノルル国際空港で足止めされてしまった。その時、一人のアメリカ軍人が妊婦の身に着けていたBABY in MEのバッチに気付き、体調を気遣ってくれたという。BABY in MEが国境を越え、人々の優しい心を引き出した瞬間だった。

「お礼が来たり、『こういうのが良かった』とか、たくさんの人が熱い思いを返してくれています。それに動かされて20年って感じですよ。いい加減なこと出来ないなって思います」。これまでの活動を振り返る声には、熱意とこれからのための覚悟が滲み出ている。

●マークの捉え方は人それぞれ

Nさんは今年の7月に女兒を出産、ママ歴6ヶ月目を奮闘している。彼女は産前休暇に入るまで、毎日約30分満員電車で揺られて出勤していた。朝早くの出勤を減らして電車のラッシュを避けるなど働き方を工夫していたが、それでも通勤時間の電車は混雑している。マタニティマークを付けていても、席を譲ってもらえることはほとんどなかったという。「サラリーマンから学生まで、座りたい人だらけ」と、Aさんは苦笑いながら振り返る。体調が悪い時、座りたいと思ってもマークに気付いてもらえないことが多かった。座っている人の7～8割がスマートフォンを見ているからだ。周囲まで目が届かない。お腹が大きくなってからも、優先席に座っていると、明らかに座れない隙間にも関わらず「席を詰めろ」と言われたことがあった。「あたしが妊娠してなかったら立ってたかもしれないけど、よろけて転んだら後悔できひんやんか。そこはわがままにならなあかんと思った」。そう言いつつも、当時は席を立とうか迷ったらしい。

Aさんにとってマタニティマークは車の初心者マークと同じだという。初心者マークを見た時、車間距離をできるだけ長くとる人もいれば、運転速度が遅くても大目に見る人もいれば、イライラしたり煽り運転をしてくる人もいる。それと同じように、マークを見て気を使ってくれる人やそもそも見えていない人、微笑ましくなったり疎ましく思ったりする人もいる。マタニティマークの捉え方は人それぞれなのだ。「体調が悪い時、ただしんどい人みたいな認識じゃなくて『お腹に赤ちゃんがいる』っていう少しでも明るいイメージにとらえてもらえたらいいな」と語る。

●噂でも、怖い

「妊娠は病気じゃないからね」。二児の母であるSさんは、以前勤めていた職場で女性の上司にそう言われた。つわりの時期は体調が崩れやすいため、仕事内容を考慮してほしい旨を伝えた。すると「病気じゃないから、あなただけを優遇することはできない」と返されたのだ。同性でも妊娠に対して理解がない人はいる。仕方がないのかもしれないが、病気と違って薬を飲めない、対処法がない。精神面に良くないと思い、結局Sさんはすぐにその職場を辞めた。

Sさんは「マークを付けるほうがいいのは分かってるけど、怖くて極力付けたくないって思った」と言う。初めて妊娠した時、主な情報源はインターネットだった。そこで、妊婦に危害を加える人がいることを知った。外で自分が倒れた時、マークがすぐに見えるところであれば迅速に適切な処置をしてもらえる。それでも、安定期に入るまでは不安だった。少しの衝撃で流産するかもしれない。「もし危害を加えられたら……」そう思うと付けられなかった。「私自身や友達も直接そういう話を聞いたことない。ネットの情報だけやけど、それを鵜呑みにしてたと思う」。しかし、何か起きてからでは遅い。マークと母子手帳はカバンにしまっていた。

それでもマタニティマークをもらえることは嬉しかった。自分が妊娠した、母になる実感が湧くからだ。妊娠初期こそ隠していたが、安定期に入ってからマークをカバンに付

けばなしにしていた。危ない目に合うこともなく、一度身に付けるとマークの存在が当たり前になったらしい。安定期からお腹が大きくなるまでの間に活用した。しかし、席を譲られることはあまりなかった。みんなマークが視界に入っていない。夫からも「なかなか気付かない」と言われたそう。妻が妊娠して初めてマークの意味を理解できたらしい。SさんにBABY in MEのデザインを見せたところ「妊婦さんの絵が描かれているほうが分かりやすくいい」と語る。お腹が大きくなってからは声を掛けてもらえる機会も増え、帰り電車やバスに乗った時には年配の方に席を譲ってもらえた。

●取材を終えて

厚生労働省公認のマークが発表されて12年が経つ。電車内やホーム、バスの中にもポスターが掲示されているため、認知度は高いものだと思っていた。しかし、現実は違うのかもしれない。遠目に見ると何を示すマークか分からない。知識がないと行動できない。明らかにお腹大きくなると妊婦だと認識してもらえないことが多いのだ。

また、マタニティマークへのイメージに関して「妊婦への特別扱い」という否定的な捉え方の意見がインターネット上を飛び交っている。しかし、決して心遣いを強制するものではない。マークは妊婦と周囲の人々を繋ぐ一つのコミュニケーションツールだ。他人への配慮のスイッチになるように、見えない命を前に少しでも笑顔が増えますように……。村松さんは、BABY in MEにそんな思いを込めた。そして、その思いは多くの妊婦の心の支えになってきた。デザイン考案から現在まで、約20年活動を続けてきたことがその証だ。ふとマークを目にして生まれた優しい気持ちが、これからお母さんになる人々に希望を与えられることを願うばかりだ。